様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　3 月　31 日現在

機関番号：14101
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2011
課題番号：22720191
研究課題名（和文）構文文法における「構文」再考－動詞後要素に注目して－
研究課題名（英文）A reconsideration of “constructions” in construction grammar: With special reference to postverbal items

研究代表者
福井　龍太　（ FUKUI RYUTA ）
三重大学・共通教育センター・特任講師（教育担当）
研究者番号：50555480

研究成果の概要（和文）：動詞不変化詞構文に出現する 2 種類の目的語は、figure と ground であるが、これらの目的語は交替という統語的派生によって生じるのではなく、それぞれ別々の構文において生じるものである。このことは、壁塗り構文の場合でも同様である。また、figure が目的語である構文の例としては使役移動構文があり、ground が目的語である構文の例としては結果構文や time-away 構文、二重目的語構文がある。構文の持つ目的語の種類に着目することによって、これまで包括的に扱われてこなかった構文を、figure を目的語とする位置変化構文と、ground を目的語とする状態変化構文に分析し直すことが可能であると示した。

研究成果の概要（英文）：Two types of objects which appear in verb particle constructions are figure and ground. This research concludes that neither of these objects is syntactically derived from the other, nor do they alternate with each other. These objects appear in distinct constructions. This is also the case with the locative alternation construction. The caused-motion construction has a figure object, and the resultative construction, the time-away construction, and the double object construction have a ground object. Focusing on the object of a construction makes it possible to reanalyze the previously-proposed constructions into two constructions: The change of location construction and the change of state construction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：　言語学・英語学
キーワード：動詞不変化詞構文、figure、ground、結果構文、使役移動構文、壁塗り構文、状態変化構文、位置変化構文。

１．研究開始当初の背景

構文文法に関しては、これまで多数の研究が行われてきた。構文文法という文法体系全体に関する研究のみならず、動詞不変化詞構文や壁塗り構文、結果構文や使役移動構文といった個別の構文に関しても、構文文法の観

点から多数の指摘がなされてきた。

構文文法に対するものとして生成文法があるが、生成文法は専ら言語の形式に注目して言語の説明を試みるのに対し、構文文法は、形式のみならず、構文や文の要素の意味や機能といった観点にも着眼し、より言語事実に即した分析を行うことが可能であると考えられる。認知意味論の一分野としての構文文法は、人間の認知により一層立脚した文法理論の構築を目標としている。

研究開始当初、動詞不変化詞構文や壁塗り構文などの分析について、生成文法と構文文法とで、どちらも動詞や不変化詞にのみ注目され、結局のところ行われている分析に違いがないと言わざるを得ないものだった。このことは、構文の名称にも現れている。動詞不変化詞構文や二重目的語構文はその形式に基づいて命名されている一方、結果構文や使役移動構文はその意味に基づいて命名されている。統一された基準ではなかったということである。

人間の認知に即した文法理論を構築できる構文文法の良さを生かしつつ、「構文」をより科学的に意味のあるものとすることを目標として、研究を進める必要があった。

２．研究の目的

研究開始当初にみられた問題点を解決するため、実際のデータに基づき、動詞や不変化詞といった従来注目されていた文法項目に加えて、目的語についても注目して分析を行う。従来着目されていた要素以外にも注目することにより、これまでに別個の構文として扱われてきた構文を再分析し、関連のある構文であることを示す。

３．研究の方法

実際のデータを、英語のネイティブスピーカーに尋ねて取得したり、DVD やインターネットから収集したりした。また、そのデータに基づいて、これまでに別個のものとして扱われてきた構文の再分析を試みた。

４．研究成果

一連の研究により、以下のことを示した。

①壁塗り構文と動詞不変化詞構文において、figure を目的語とするものと ground を目的語とするものは、統語的な派生(交替)によって生じるのではなく、全く別の構文であること。

以下(1)に例示される構文は壁塗り構文と呼ばれ、(2)に例示される構文は動詞不変化詞構文のうち、除去の意味を持つものである。

・壁塗り構文

(1) a. John sprayed *the paint* onto *the wall*.（ジョンは壁にペンキを吹きつけた）

b. John sprayed *the wall* with *paint*.（ジョンは壁をペンキで吹きつけた）

・動詞不変化詞構文

(2) a. John wiped *the dust* off.（ジョンはホコリを拭き取った）

b. John wiped *the table* off.（ジョンはテーブルを拭き取った）

ここで、*the paint* や *the dust* は移動する物体であり、figure である。また、*the wall* や *the table* は出来事が生じる場所であり、ground である(cf. Talmy (2000), McIntyre (2007))

この a, b の文が、交替(派生)によって生じるとする先行研究(cf. McIntyre (2007))があるが、交替によって生じると仮定すると、以下の(i)-(iv)の事実が説明できない。

(i)全体性効果(holistic effect)の有無：ground を目的語とする構文の目的語のみに全体性効果がある。

(3) a. John smeared *paint* on the wall, but most of the wall didn't get any paint on it.（ジョンはペンキを壁に塗ったが、壁の大部分にはペンキがついていなかった。）

b. #John smeared *the wall* with paint, but most of the wall didn't get any paint on it.（ジョンは壁をペンキで塗ったが、壁の大部分にはペンキがついていなかった。）

(cf. Anderson (1971))

(4) a. John squeezed *juice* out of the orange.（ジョンはオレンジからジュースを搾り取った。（オレンジにはまだジュースが残っていてもよい））

b. John squeezed *an orange* out.（ジュースの大部分がオレンジには残っていない）

(cf. McIntyre (2007))

(ii)動能構文(conative construction)；前置詞構文の一種への出現の可否：ground を目的語とする構文の動詞でのみ動能構文が可能である。

(5) a. John sprayed at *the wall*.

b. *John sprayed at *the paint*.

(6) a. John wiped at *the table*.

b. *John wiped at *the dust*.

(cf. Levin and Rappaport (1991), Levin (1993))

(iii)統語的振る舞いの相違：ground を目的

語とする構文と figure を目的語とする構文で動詞後要素の振る舞いが異なる。

A．figure を目的語とする構文では、*of* は省略できるが、ground を目的語とする構文の場合、*of* を省略できない。

(7) a. John wiped *the dust* off (of) the table.
b. John wiped *the table* off *(of) dust.

B．figure を目的語とする構文では、分裂文に現れるので *off the table* は構成素をなすが、ground を目的語とする構文では現れないので *off* と *of dust* は構成素をなさない。

(8) a. It is *off the table* that John wiped *the dust*.
b.* It is *off of dust* that John wiped *the table*.

C．ground を目的語とする構文のみで、*off* が動詞直後に置かれてもよい。

(9) a. John wiped *off the table* of *dust*.
b.* John wiped *off the dust* of *the table*.
(cf. 福井(2008), 福井(2010))

(iv)figure を目的語とする構文のみで、目的語が示すものとその直後の要素に叙述関係がある。

(10)a. *The paint* is on the wall.
b. **The wall* is with paint.
(11)a. *The dust* was off of the table.
b. **The table* was off of dust.

(i)-(iv)の事実は、ground を目的語とする構文と figure を目的語とする構文が派生して生じたものではなく、別個の構文であると考えると問題なく説明できる。

②使役移動構文の目的語が figure であること。

上記の、壁塗り構文と動詞不変化詞構文に関する議論を、使役移動構文についても当てはめてみると、使役移動構文の目的語は figure であると言える。

・使役移動構文

(12)a. John sneezed the tissue off the table.（ジョンはくしゃみをしてテーブルからティッシュを吹き飛ばした）
b. Mary urged Bill into the house.（メアリーはビルが家に入るよう追い立てた）
c. Joe hit the ball across the field.（ジョーはボールを野原の向こう側へ打った）
(cf. Goldberg (1995))

使役移動構文の目的語が figure であるとする根拠は以下の通りである。まず、目的語が示すものが移動している。また、全体性効果が存在せず、前置詞構文へ出現することもできない(cf. (13))。

(13)a. *John sneezed at the tissue.
b. *Mary urged at Bill.
c. *Joe hit at the ball.

figure を目的語とする構文の場合、目的語が共通して位置変化している。故に、figure を目的語とする構文を位置変化構文と呼ぶこととする。

③結果構文の目的語が Ground であること

次に(14)に例示される結果構文について考える。

(14)a. John painted the wall red.（ジョンは壁を赤く塗った）
b. The joggers ran the pavement thin.（ジョギングをする人たちは舗装が薄くなるほどたくさん走った）
(cf. Carrier and Randall (1992))
c. John wiped the tool clean.（ジョンはその道具を拭いてきれいにした。）

ここで、結果構文に出現する目的語について観察すると、目的語は ground であると考えられる。その根拠は以下の通りである。まず、目的語が示すものが移動しない。また、目的語に全体性効果がある。さらに、(15)に例示される動能構文(conative construction)に同一の目的語が出現可能であることである。動能構文では前置詞が出現し、前置詞の目的語は ground であるため、動能構文に出現可能であることは、ground であることを示すものである。

(15)a. John painted at the wall.
b. The joggers ran on the pavement.
c. John wiped at the tool.

結果構文の目的語が ground であることは、以下(16)の例からも示される。

(16)a. John painted the wall red.
b. *John painted the picture red on the wall.

(16a)は容認されるが、(16b)は容認されない。これは、*the wall* は色を塗る行為が行われる場所であるが、*the picture* は色を塗ったことにより出現する物体であるからである。すなわち、*the wall* は ground であり、*the*

picture は figure である。従って、結果構文の目的語は ground であると言える。

結果構文は、ground を目的語とする構文である。結果構文は、目的語が状態変化を被ることが以後、目的語が状態変化することから、状態変化構文と呼ぶ。

④位置変化構文と状態変化構文

上記の議論を踏まえると、これまで、動詞不変化詞構文、結果構文、使役移動構文と呼ばれていた構文は、figure を目的語とする位置変化構文と、ground を目的語とする状態変化構文の２つに再分析できる。

⑤time-away 構文の目的語や、二重目的語構文の間接目的語が ground であること。

(17)に例示される構文は time-away 構文であり、(18)に例示される構文は二重目的語構文である。

(17) John danced the night away.(ジョンは踊って夜を明かした)
(18) John gave me a book.(ジョンは私に本をくれた)

time-away 構文の目的語や二重目的語構文の間接目的語が ground であるという根拠は以下の通りである。まず、目的語が示すものが移動しない。また、(19)に示されるように、time-away 構文の目的語については、前置詞構文に出現することが可能である。

(19) John danced at/in/on/during the night.

これより、time-away 構文の目的語や二重目的語の間接目的語は ground であると見なせる。

⑥ground を直接目的語とする動詞不変化詞構文の不変化詞の種類

以下(20)の動詞不変化詞構文で、off や out は可能であるが、on や in は不可能である。

(20) He wiped the table off/out/*on/*in.

先行研究では、可能な不変化詞について、結果構文において可能な形容詞についての議論を援用することで説明している。

Wechsler (2005)は、結果構文において結果句となることができる形容詞は、結果構文の telicity を保証することができる『最大点のある閉鎖スケール形容詞』でなければならないと主張しており、これを Levin and Sells (2007)が不変化詞にも援用することで、*off* や *out* はこのタイプの形容詞と見なせると主張している。しかし、小野(2007)の観察によれば、結果構文には、おおむねどのタイプの形容詞も結果句として現れることが可能であるので、Wechsler や Levin and Sells は誤った前提の上に立って議論していると考えられる。

ここで、以下(21)を観察する。(21a)から、*of* が省略できるのは figure が目的語になっている場合であることがわかる。すなわち *off the table* が前置詞句であるということである。一方で(21b)から、*of* が省略できないのは ground が目的語になっている場合であることがわかる。すなわち *of dust* が前置詞句である。また *off dust* と言うことができないので *off* は不変化詞であるといえる。

(21) a. John wiped *the dust* off (of) the table.
b. John wiped *the table* off *(of) dust.
(=(7))

他方(22, 23)の観察から、*the table* や *the box* が ground 目的語になることはできないので、*on* や *in* は前置詞であるといえる。

(22) a. John wiped the dust on *(the table).
b.* John wiped the table on.
(23) a. John wiped the dust in *(the box).
b. *John wiped the box in.

ここまでの観察から、*on* や *in* は常に前置詞であるために、ground が目的語である動詞不変化詞構文、すなわち結果構文に現れることはできず、使役移動構文にしか現れないが、*off* や *out* は、前置詞句である場合と不変化詞である場合があるために、前置詞である場合には使役移動構文に、そして不変化詞である場合には ground が直接目的語である動詞不変化詞構文つまり結果構文に現れると考えられる。

一連の研究により、従来、ひとつの構文が派生する関係にあるとされてきた動詞不変化詞構文や、それぞれの関連性について十分に示されているとは言えなかったいくつかの構文は、状態変化構文と位置変化構文であると結論づけられた。反例や例外と思われるデータが存在するが、これについては今後の研究で明らかにしていくこととしたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1.福井 龍太 (2012)「動詞不変化詞構文の２種類の目的語について：壁塗り構文・結果構文・使役移動構文との比較から」*JELS* 29,

24-30. (査読あり)

2. Ryuta Fukui (2012) “A note on *pat NP dry* and *beat NP clean*,”*Philologia* 43, 49-54. (査読なし)

3. Ryuta Fukui (2011) “On the Ground Object Verb-Particle Construction,”*Philologia* 42, 49-59. (査読なし)

〔学会発表〕（計 6 件）

1. Ryuta Fukui (2012) “On a constructional account of the Ground object verb-particle construction,” Workshop In General Linguistics (WIGL) 10, 2012 年 3 月 17 日, University of Wisconsin, Madison.

2.福井 龍太 (2011)「動詞不変化詞構文の２種類の目的語について：壁塗り構文・結果構文・使役移動構文との比較から」日本英語学会, 2011 年 11 月 13 日, 新潟大学.

3.福井 龍太 (2011)「なぜ“wipe the table on”とは言えないか」新潟大学教育学部英語学会, 2011 年 7 月 30 日, 新潟教育会館(豪雨により会合なし・資料発表の形式に変更).

4.福井 龍太 (2011)「所格交替構文は「交替」しているか」三重キャリア研究会 2011 年度第 7 回研究会, 2011 年 5 月 21 日, 三重大学.

5.福井 龍太 (2011)「英語の状態変化構文と位置変化構文について」三重大学アカデミックフェア 2011, 2011 年 2 月 11 日, 三重大学.

6.福井 龍太 (2010)「動詞不変化詞構文と結果構文の目的語について」2010 年度国際教育フォーラム, 2010 年 6 月 23 日, 三重大学.

６．研究組織

(1)研究代表者

福井　龍太　（ FUKUI RYUTA ）
三重大学・共通教育センター・特任講師（教育担当）
研究者番号：50555480